

前回(2024年4月号)に引き続き、アメリカで General Assembly of The Presbyterian Church が発行していた月刊誌『The Church at Home and Abroad』Vol.XVI. No.94, (October 1894) に掲載された天理教に関する記述をみていきたい。

前半では天理教の概略が述べられていたが、後半に入ると信仰実践の様子について書かれている。まず、“In their worship, they rely a great deal upon noise, using the drum, fife and shamisen, accompanied by the dance.”(かれらの祈りは、太鼓、笛、三味線をつかって踊るため、非常に騒々しい。)と記述している。そして、“They teach the defilement of sin and the necessity of spiritual purification.”(天理教では罪による汚れと精神浄化の必要性を説く。)と説明した上で、“The most usual prayer to their god, Tenrio, is ashiki wo harei (take away my sins). As they repeat this, the hands are turned, palms outward, and pushed forward, as though pushing the sin away. Then the hands are reversed palms inward, and drawn towards the breast, while the prayer kigomi tamae, (make me clean) is repeated many times.”(彼らの神テンリオーへのごく日常的な祈りは、アシキ ヲ ハレイ(私の罪を取り除く)である。これを繰り返し唱えながら、罪を追い払うように両手をひっくり返し手のひらを外へ向け前で押し出す。そして、キゴミ タマエ(私をきれいにする)という祈りを何回も繰り返し唱えつつ、手のひらを内側に反転させながら、胸に向かって引きつける)と祈る際の手ぶりについて紹介している。このように、手振りの実際の様子を記している点は非常に興味深い。

天理教の現状については、“The Tenrikyo is sanctioned by the Government as a branch of Shinto, but it has met with opposition, and persecution, from the Buddhist priests whose prestige suffers on account of it.”(天理教は神道の一派として政府から公認を受けているが、仏教の評判が損なわれているとして、僧侶たちから反対や迫害を受けている。)と説明している。

最後にこの記事の筆者は、天理教の発生と急速な進展の理由について以下のように考察している。

It will be a matter of surprise to many that a religion founded upon such a low grade of superstitious stories could get any hold in Japan. But it is a fact that a large mass of the people have come into very slight contact, if any, with the new civilization that has been at work for two or three decades. The majority of farmers and ignorant people are practically in the same state of civilization that they have known for hundreds of years. They are industrious, honest and fearfully superstitious.(多くの人々にとって、このような低俗な迷信にもとづく宗教が日本で受け入れられていることは驚きであるだろう。しかし、日本が新しく文明化されてから未だわずか20、30年であり、多くの人々はこの文明にほとんど接触していないか、もし触れていたとしてもごくわずかであるのは事実である。農民や無学な人々の大多数は実質的にはこれまでの何百年と同じような文明のレベルにある。かれらは勤勉で、真面目

で、そして恐ろしいほど迷信的なのである。)

Is this a beginning of the gradual disintegration of the old faiths of Japan? Many of the new religions of India are so interpreted. There is little doubt that Buddhism is losing its hold on the confidence of the people, because of the immorality of the priesthood. The low state of morals is lamented all over the country. The Tenrikyo seems to be an attempt at a moral reformation. Has it risen through dissatisfaction with Buddhism? Will the dissatisfaction continue to deepen, and the breach to widen?(これは日本の古い信仰が段々と崩壊していく始まりだろうか。インドの多くの新宗教においてはそのように解釈されている。僧侶の品位の低下により、仏教が人々の信頼を失っていることはまちがいない。モラルが低下している様子は日本中で見られる。天理教は一つの道徳的改革の試みであるようにみえる。仏教への不満から天理教が発生してきたのだろうか。不満はますますつり、民衆との亀裂はどんどん広がり続けるのだろうか。)

Is there not an important field among this class of people for Christian work? So far Christian propagation has been carried on largely in the great middle class, beginning with the Shizoku and students, and more or less among merchants and soldiers. But comparatively little has been done among the agricultural and lower classes. Here is a great population ready and waiting for the Gospel.(キリスト教伝道にとってこの階層の人々は重要な対象者ではなかったのではないか。これまでキリスト教の宣教対象は主に士族や学生などの中産階級であり、それ以外では商人や軍人であった。それに比べると農民や下層階級へ宣教はなされていなかった。今ここに、多くの人々は福音を聞く準備ができ、その日を待っているのである。)

このようにこの記事の筆者は、天理教の発生と伸展に関して、下層階級の人々の無学さという点、日本の伝統的な宗教の衰退という点、そしてキリスト教の宣教活動において下層階級はその対象となっていなかった点について言及し、福音を待つ多くの人々の存在があるのだと結んでいる。そこには、天理教という新興の宗教に注目しながら、当時の日本でのキリスト教伝道への新たな展開に期待している様子がうかがわれる。

今回の天理教紹介記事は、以前取り上げた英字新聞『Japan Weekly Mail』の1894年3月3日号に掲載された天理教についての記事同様、まとまった分量で掲載された英文の天理教紹介としてはかなり初期のものと言えるだろう。天理教に関する最初の英文研究論文とされるグリーンによる『Tenrikyo』は、翌1895年3月と6月にまず『Japan Weekly Mail』にて研究報告会での発表記録として掲載され、同年12月に『日本アジア協会紀要』上で論文として発表されている。このグリーの論文についてはこれまでもさまざまな天理教研究者によって取り上げられているが、次号以降それらを概観しながら、この時期におけるグリーン論文の意義を改めて考えてみたい。